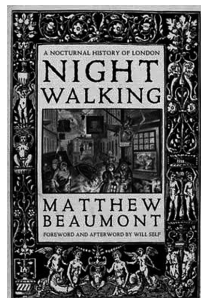
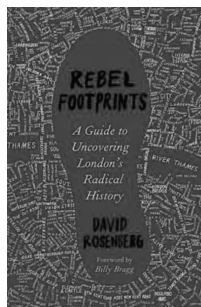


書 評

Matthew Beaumont, *Nightwalking:
A Nocturnal History of London*
(London: Verso, 2015)



David Rosenberg, *Rebel Footprints:
A Guide to Uncovering London's Radical History*
(London: Pluto Press, 2015)



町本 亮大

孤独に街路を彷徨う一人の男。都市の経験を表象するのにしばしば用いられるこの文学的「装置」の系譜は、英文学史のうちにもはっきりと認めることができる。レイモンド・ウィリアムズは*The Country and the City* (1973) の第20章において、この伝統の出発点にウィリアム・ブレイクを据え、それが20世紀にはT. S. エリオットへと継承されるのを跡付けた。マシュー・ボーモントは*Nightwalking: A Nocturnal History of London*において、この文学的伝統の出発点をブレイクより前に、18世紀グラブ・ストリートの詩人、著述家たち——ゴールドスミス、ジョンソン、サヴェッジら——まで遡って叙述する。また都市を歩く男でなく、夜の都市を歩く男の系譜を、文学史のみならず、とりわけ初期近代以前については社会史へと足を踏み入れつつ描き出す。本書は13世紀から19世紀にわたる期間における、主としてロンドンを舞台とする「夜歩き」の歴史を扱う、ある種反時代的な通史の試みである。あるところでは社会史の概説として機能し、また別のところでは独自の視点から描出される英文学史として読むこ

とができる。ボーモントはオックスフォード大学で19世紀末のユートピア文学について博士論文を執筆する際(博論を基にした研究書は*Utopia Ltd.: Ideologies for Social Dreaming in England 1870-1900*として2005年に出版されている)、当時同大で教えていたテリー・イーグルトンから指導を受けている。『批評とは何か』として邦訳の出ているイーグルトンのインタビュー集において聞き手を務めているのがボーモントだ。*Nightwalking*において彼は、マルクス主義系の学者・批評家として、自身の得意としてきた大陸系の批評理論家たち——ベンヤミン、バフチン、フーコー等々——のテキストを持ち込むこともあるかと思えば、夜に取り憑かれ都市の闇を亡霊のように徘徊することを常としたディケンズの作品と生涯を伝記的に丁寧に追って説明したり、ブレイクの詩「ロンドン」を韻律に注意を払いながら精読しその新解釈の提示を試みたりもする。全体としてはいかなる方法論に依拠するいかなるディシプリンの専門家であることも読者に要求しないから(ただし著者自身は種々の領域の先行研究をリサーチし細かく文献情報を付している)、500ページ弱の大著でありながら、楽しんで通読することのできる開かれた書物として作られている。

なぜ夜のロンドンなのか。歴史研究においても文学研究においても既に多くの「ロンドンもの」が著されてきたものの、都市文化の研究の中で「夜の都市」に焦点を当てるものは必ずしも多くないから、というのが一つの理由であろう。この状況を是正するのが本書の目的の一つ、ということになる。実際に本書は、夜の都市の「住人」であるホームレス、娼婦の歴史、電灯導入以前の公共照明の歴史、初期近代以前の夜間外出禁止令(*curfew*)の歴史、夜警の歴史等を、社会史の文献に依拠しながら説明しており、都市の歴史の「暗黒面」について多くの知識を提供してくれる。

しかしボーモントはいわばより積極的な理由を持ってこのテーマに取り組んでいるとみることができる。彼は夜の都市を放浪する者の系譜を、一つのナラティヴを通して描き出そうとする。すなわち本書は、13世紀以前は犯罪者としての地位に置かれていた「一般的夜間放浪者(*common nightwalker*)」という法的カテゴリーが、いわば「非一般的夜間放浪者」とでも呼ぶことのできる存在へと移り変わっていく様子を、イングランドの法的、文学的言説の変遷の中に辿っていく。それはホームレスの姿が、グ

ラップ・ストリートの詩人、ボヘミアンの作家の姿によって流用・上書きされていく様を跡付けることであり、だから大部分が時系列通りに構成される本書は、ページを先へと進めるにつれて、社会史から文学史へとその比重を移していくことになる。ヨーロッパの主要都市で街灯が導入されるようになるのは17世紀の後半であり（ロンドンでは1684年）、これに伴うナイトライフの誕生により、「一般的夜間放浪」という犯罪カテゴリーは18世紀を通して有名無実化する（少なくとも「名」としては1967年まで制定法全書に存在し続けるのであるが）。17世紀を通して夜間外出禁止令も廃止されていった。しかし照明技術の向上等により実現したナイトライフは、中流、上流階級の人々の特権的経験であり、ビーティ（J. M. Beattie）が *Policing and Punishment in London, 1660-1750* (2001) において「道徳的、社会的夜間外出禁止令」と呼ぶものはその後も長く存在し続け、同時に「夜間放浪者」の準犯罪的な連想は保持されることになる。彼らが法と市場の論理を侵犯する存在として現実に取り締まりの対象となっていた中世・初期近代のあり方が、18世紀以降にも象徴的に残存し、「夜の放浪者」はボヘミアンの作家、詩人たちが対抗文化的に自己同一化を試みる「記号」として機能し続けた。

夜の都市は、産業資本主義の課する規律＝訓練の網の目からはみ出す「逸脱者」たちの領域であり、ボーモントがこうした「逸脱者」たちに自らを象徴的に同一化しようとした（またリチャード・サヴェッジ、ジョン・クレアのようにじしん「逸脱者」そのものとして夜の放浪者となることを余儀なくされた）イギリスの作家、詩人たちの系譜を描き出そうとする動機は、E. P. トムスンやレイモンド・ウィリアムズといった初期ニューレフトの思想家たちの試みを半ば受け継ぐ形で、資本主義の近代に批判的な詩人、著述家たちによって構成されるイングランドの対抗的伝統を、「夜の放浪者（nightwalker）」というモチーフを中心に据えて語り出すことにあるように思われる。ボーモントの言葉に従えば、夜の都市の放浪者たちは「意識的、無意識的に、昼のロジック——通勤者（commuters）と商品（commodities）の絶え間なき運動——を拒絶する」のである（11）。ロマン派以後の作家、詩人でとりわけ重要な扱いを受けるのは、ブレイク（9章）、トマス・ド・クインシー（10章）、ディケンズ（12-13章）であるが、このうちブレイク

についてはトムスン、ド・クインシーについてはジョン・バレル (John Barrell) の先行研究が重要な文献として引用されている事実もこのことと無関係ではないだろう (バレルの「風景の政治学」が田舎の風景の表象を問題にしたのに対して、ボーモントは本書で都市の「暗黒面」へと関心を集中させる)。これらの正典的人物に比べれば広く読まれているとはいえないクレア (8章) にしてもウィリアムズとバレルが注意を向けたロマン派詩人であり、少なくともロマン派以後を扱う部分に関していえば、ある作家、詩人を新たに発見した、新たに光を当てた、という功績が本書に帰せられるようには思われない。とはいえ18世紀までは、ウィリアム・パッティソンやサヴェッジをプロト・ロマン派として位置付け紹介するなど、あまりよく知られていない詩人、著述家を多数扱っており、社会的背景の解説を含んだ「夜歩きの英文学史」として、批評的でもありながら、同時に歴史研究・文学研究双方の先行研究にも丁寧に目配りがなされている、他に類書の見当たらない個性的な英文学史記述となっている。

Nightwalking をディシプリンの枠組みに当てはめ分類せねばならないとすれば、英文学の研究書ということになるだろうが、対してデイヴィッド・ローゼンバーグの *Rebel Footprints* は歴史研究に属する (ボーモントは現在UCL英文科の教授、ローゼンバーグは独立の研究者)。後者の副題にある 'A Guide to Uncovering London's Radical History' というのが、ある意味で両者の共通性の説明になっているといえるかもしれない。*Rebel Footprints* は1830年代から1930年代までの、ロンドンに拠点を置いた草の根の社会運動——チャーティズム、労働運動、女性参政権運動、反ファシズム運動等々——の歴史を辿るものであり、「下からの歴史」として、メインストリームの運動史においては見逃されがちな個人・運動等に特別の注意を向ける。インド系、ユダヤ系、アイルランド系等の移民の活動が重点的に扱われるのも同様の関心に由来する。ストライキ——walk outすること——の足跡を辿るのが主要な目的の一つで、先に触れる余裕がなかったが、「歩くこと (pedestrianism) の政治学」(ボーモント) というテーマ、ジェントリフィケーションによる専有化に抗して「都市への権利」(アンリ・ルフェーヴル、デイヴィッド・ハーヴィ) を奪還することへの関心が、ボーモントとローゼンバーグのあまり似ていない二つの「ロンドンもの」の共有するところで

あるといえるかもしれない(つい先ごろ邦訳の出版されたレベッカ・ソルニットの *Wanderlust: A History of Walking* はボーモントによって引用されている)。

Rebel Footprints は、クラーケンウェル・グリーン、スピタルフィールズ、ブルームズベリー、バーモンドジーといったエリア別に各章が構成され、それぞれの章末には、本文で言及された人物、運動、出来事、機関等に所縁のある場所をじっさいに歩いて回れるように、ポイントごとに番号のふられた地図と、番号ごとに関連する説明文が付されている(‘WALK’と名付けられたパート)。ここからこんにちの、そして未来の社会運動の実践者たちが「過去の街路での戦いから励ましと閃めきを引き出すことができる」ようにすること、都市での社会運動の実践の歴史的連続性の感覚を継承すること——これが著者の意図の一つである(288)。著者はこの連続性の感覚を次のように例示する。

サフラジェットが紫、緑、白のトライカラーを採用した際、彼女たちは意識的に、チャーティストたちによって先立って使用されたシンボルを採用したのだった。ハイド・パークにおける1908年の大規模なサフラジェットの集会において、演説者たちは1860年代のまさに同じ公園における改革連盟(Reform League)の劇的なデモンストレーションの記憶を呼び起こした。(291)

ロンドン南東部のバーモンドジーを扱った章を簡単に紹介したい。ストライキの歴史を語るに際しては、ロンドンの具体的な地理へと目を向けることがとりわけ役に立つ。たとえば1926年のゼネストにおいては、テムズ以南のバーモンドジー、サザーク、カンバウエルが戦略的要地であった。バーモンドジーには多くのドックと組合加入の工場が存在したし、カンバウエルには大手のバス会社のティリングズが位置していた。またサザークのエレファント・アンド・カッスルは、バスや商用車の通行する道路の合流点であったからである。地図を広げて逐一場所を確認しながら読み進めればイメージが湧いてくる。

ディケンズが *Oliver Twist* (1837-39) でジェイコブズ・アイランドを描き、ヘンリー・メイヒューが1849年のコレラ発生による死者のとりわけ多かつ

た地域として取り上げたバーモンドジーであるが、チャールズ・ブースの1903年調査の時点においても貧困の状況は改善されておらず、周辺地区は「慢性的欠乏」の状態にあった。ジョージ・オーウェルが*Down and Out in Paris and London* (1933)の調査のためにバーモンドジーに拠点を置いたことを思い返せば、同地の人々の生活状況はこの期間、一向に改善しなかったと想像したくなる。しかし実際には1920-30年代には社会主義的志向をもった活動家たちの先駆的な取り組みにより大きな変革を経験したのであり、「もしオーウェルが〔トゥーリー・ストリートでなく〕かわりにバーモンドジーの中心部に滞在していたならば、彼は違う語り方をしたであろう」——そうローゼンバーグは書く(229)。社会運動の通時的連続性・異なった地域間の横の連帯へと目を向けることを促しながらも、こうした細部の地理的差異に注意を払う本書は、都市に埋め込まれた(しかし失われつつある)過去の闘争の記憶と「対話」をするための地に足のついた格好のガイドであるといえるだろう。一般にも広く読まれうる書物として企図されているためか、先行研究への言及がきわめて限定的なものとなっているのが難点である。

——ロンドン大学(UCL)博士課程